

「教育と医学」1・2月号

東京大学大学院教育科学研究科教授 遠藤利彦先生の著書
アタッチメント研究の現在とこれからの行方を読んで

1. はじめに

今回は、東京大学大学院教育科学研究科教授 遠藤利彦先生の著書「アタッチメント研究の現在とこれからの行方」を読んで私が学んだことを述べます。

2. 私が学んだ大切な言葉

子どもがある危機的状況に接し、不安や恐れなどの情動が強く喚起された時に、周囲の何者かにしっかりとくっつく (attach)、あるいはくっついてもらうことを通して、安心感を回復・維持しようとする心理行動的傾向およびしれに結びついて神経生理的制御メカニズムのことをアタッチメントと呼びます。乳幼児期の安定したアタッチメントはどのような意味で子どもの心身発達を支え促すものだと言えるのでしょうか。ここでは四つの視点から考えてみたいと思います。

一つ目は、「アタッチメントが自分や他者に対する基本的な信頼感の形成に通じる」ということです。恐れや・不安の状態にある時に、無条件的に、かつ一貫して、親や保育者などの特定の誰かから確実に護ってもらおうという経験の蓄積により、子どもはそうしてくれる他者に対して信頼の感覚を、そして自分にはそうしてもらえだけの価値があるという感覚を獲得することが可能になります。

二つ目は、「アタッチメントが自律性の発達に深く関与する」ということです。子どもは、怖くて不安であるような場合に、特定の誰かにくっつくことで、安心感を得ることができます。そして、その経験が日常、繰り返されることで、自分は何があっても必ず護ってもらえるのであという事に確かな見通しをもてるようになります。

三つめは、「アタッチメントが共感性や心の理解能力の発達にも寄与する」ということです。子どもが恐れや不安などの感情をもって近づいてきた時に、親や保育者を始めとする大人は、その崩れた感情をただ立て直すだけではなく、多くの場合、感情的に寄り添い、共感・同調し、自分自身が「鏡」となって、子どもの心の状態を映し出す役割を果たしています。

四つ目は、「アタッチメントが脳や身体の発達にもかなり大きな影響力を有している」ということです。アタッチメントは、多くの場合、恐れや感情によって活性化される訳ですが、そもそも、この恐れや感情は、基本的に、逃げるのに適した緊急反応を瞬間的に脳や身体の中に引き起こします。アタッチメントによる緊急反応が効率よく元の平常状態に戻されることが乏しくなれば、当然、脳や身体の発達にも悪影響が及ぶことになります。

2. おわりに

私たち放課後支援員は、こどもの心の基地となり、こどもたちが安心して社会の中で活動できるように支援することが大切だと思います。

KM テクノソリューションズ代表 南側晃一